

## 第5章

# 関与観察とエピソード記述

ここまでワークショップの体験理解について場に関与する主体の内側からの実感の感受認識に根差して体験を捉える必要性を論じてきた。本章では関与観察者の主観性・間主観性を重視したエピソード記述の考え方と方法について検討する中で、ワークショップ体験を捉える研究方法としての可能性を考察する。

### 1. 臨床研究における客観科学の相対化

先に芸術教育の実践においては理性と感性の動的統合を具体的にどう行なうかが、認識論と同時に芸術と人間形成にかかわる難問であることを確認した (Read, 2001; 宮脇, 1988, 1993)。表現活動を媒介とするワークショップの体験においても、感性はその曖昧さ・両義性 (ambiguity), 全体性 (Holistic) の説明と理解の難しさゆえに、必ずしも十分な評価を与えられてこなかった。それは感性的な認識そのものの曖昧さに起因するだけでなく、客観科学のパラダイムが要請する科学研究の要件に十分応えられないというパラダイム上の困難があったためである。その点で心理学はいち早く自然科学と同様の科学的な学問になることを目指して、自然科学的な客観科学のパラダイムに適合していったが、それによって臨床的事象の固有性や文脈性に基づく体験の一回性を捨象してしまったことは、今日の人文諸科学に広く共通する問題となっている。

全ての事象に適用可能な普遍的な一般理論の発見を目指す自然科学とは異

なり、人文科学では事象の個別性や固有性、主観性を多分に含む生態学的なリアリティを持った生活世界の実践を研究対象とする。本質的に自然科学とは要請されるパラダイムが異なるものである。現代社会において圧倒的に支配的である自然科学の客観主義パラダイムに基づいて臨床実践の研究を行うことで得られる知見も多いことは確かである。しかし、客観科学パラダイムに即しては捉えられない体験もあり、異なるパラダイムを志向した研究を模索していく必要がある。

## 2. 臨床的実践研究における接面の重視

心理学ではこの問題に対して質的研究による新たなパラダイムの模索が行なわれてきた。質的研究は20世紀に主流であった行動主義心理学に基づく実験心理学の反省に立っている。柴山(2006)によれば、今日の心理学は「子どもを日常生活から切り取り、環境や他者と関わりを持たない孤立した個体であるかのように見なしてきたことへの反省」や「子どもの育ちを要素に還元して一義的な因果関係として分析してきたことへの反省」を基にしているという(p.16)。

ワークショップとは、望ましい発達や目標に即して相手の行動を変える意図的行為が必ずしも中心的なものではない。そのため、意図的視点から捉えられる行動変化だけを有意なエヴィデンスとして取り上げるのではなく、現場での人と人のかかわり合いにおける自分の気持ちや心の動き、相手の心の動きを捉えていく必要がある。そうした心の動きが生じ、相互に触れ合っている関係的な場が「接面(= In Between)」(鯨岡, 2013)である。自分や相手の気持ちとその動きが主観的・間主観的に感じられる、接面における人間相互の感性的体験を臨床実践の研究では重視していく必要がある。

こうした接面を重視するパラダイムは「接面の一方の当事者である研究者自身がその接面で起こっていることを自らの身体を通して感じ取ることに重きを置く枠組み」(鯨岡, 2013, p. 24)である。実践の目的に即した合理的な言葉や行為といった理性的コミュニケーションに加え、目に見えない相手の心の動きや場の雰囲気や感受、情動やその力動感である vitality affect の交

わし合いによる、主観的・間主観的に媒介される感性的コミュニケーションが重要になる。「接面を無視ないし消去する枠組み＝客観科学パラダイム」に対し「接面で生じていることを重視する枠組み＝接面パラダイム」の方がより現場の実体に即しており、鯨岡は観察者や当事者としての「私」が接面で感受した感じや、その時に考えていたことの生き生きとした実感を重視し、それを軸に事象理解を深め考察する方法としてエピソード記述を練り上げた<sup>1)</sup>。

### 3. エピソード記述のアクチュアリティと明証性

臨床的な体験を捉えるエピソード記述とは、出来事を描き出すための文書作成技法や状況記述は異なるものである。「書くことをとおして体験の『意味』へと向かい、新たな問いを立ち上げ、他者と『意味』を共有することへと向かう」(鯨岡, 2005, p. 11) ものである。そのためには、ある現場の事象の生の断面を描こうと思いつく人の背景的な問題意識や、そこに立ち現れてくる基本的な問いが重要となる。そこから生の断面の意味が掘り起こされるところにエピソード記述があり、質的研究としての特性がある。

また、エピソード記述はその人の生き様の「あるがまま」を目指し、その意味の浮上が重要となる。「あるがまま」を把握する上では事象の客観的側面は重要であり、現象学に基づくエピソード記述では事象に忠実であることは必須の条件である。この場合の事象に忠実であるとは、客観主義＝実証主義と同義ではなく、接面を捨象せず、「人の生のアクチュアリティを可能な限りあるがままに描き出すこと」(p. 21) という意味である。

しかし、客観的な事象の忠実な記述だけでは「あるがまま」に迫ることはできない。そこに関与者が主観的・間主観的に感じ掴んだことを入れ込んでいく必要がある。そのためには場を共に生きる関与者、場から切り離すことのできない当事者でもある「私」(関与観察者)にとってはそう感じられたのだという、否定しがたい実感の事実と実証性を手放すべきではない。それゆえ観察者も接面の一方の当事者として、「『その接面でいったい何が起きているか』を研究者自身の身体を通して感じ分ける態度で観察に従事する」